

7. 児童劇

わたしは近頃とても児童劇の必要を感じる。その理由は、専門学者の本からはるばると、演劇本能とかの話を用いて説明するまでもない。ただ自分の子どもの頃の経験を回想すれば明らかになる。

アメリカの『若草物語』の著者オールcott (Louisa Alcott) は言う。“倉庫での劇が、最も楽しい娯楽であった。わたしたちは大規模に童話を演じた。わたしたちの巨人は二階から転がり落ちて、ジャックが梯子に絡んだ南瓜の蔓を、あの豆の木の幹に見立てたのを、断ち切った時。灰かぶり (Cinderella) が大きな冬瓜に乗って馳せてゆく。黒い腸詰が一本見えない手によって三つの願いを浪費した女の鼻の上で大きくなる。”

“巡礼の修道士は、頭陀袋に杖をつき帽子には帆立貝の殻をつけ、山中の道をゆく。土地の精霊はひそひそと話しながら白樺の林で宴会を開く。野原の四阿でイチゴ狩りの女友達が詩人と哲学者の賛美を受ける。彼らは自分の機知と知恵を食としているが、少女たちは捧げものは実際の食物である。”

われわれの回想はこんなに優美ではない、だがやはり同じよう的重要であって、少なくとも自分にとってはそうである。わたしは“童話の演劇化”があったことは覚えていない。十歳以前の事はほとんど忘れてしまった。今覚えているのは十二歳で三味書屋に勉強に行った時の事である。その時読んだのは“下中”〔「中庸」下篇〕と唐詩である。当然何も解らなかったが、路上や塾では多少の見聞は得て、幼い心に空想の世界を建てさせることができ、不安で寂寥な童年を慰められたことは、とても懐かしい。家から塾までは十軒と離れていなかった。その中の一軒の主人は頭でっかちで、家ではまたふだん見慣れぬヤギを飼っていて、（後でわかったのだがこれは火の神の魔除けに飼っていたのだ。）とても超自然な感じがあった。同窓に丈が高く、顔はふつうの人と変わらなかったが、全体の比例からとても小さく見えた。また一人先輩がいて、阿片を吸うために、〔案山子のように〕両肩が骨張って、まるで大杉のなかに一本横棒を入れたようであった。これらは現実の人であったが、その時はどこかすこし異様に見えたので、演劇化がされて、二株の木犀のある中庭でこの日常の童話劇が演ぜられた。“でっかち頭”は不幸にも凶悪な巨人にされ、ヤギを引き連れ、岩穴を占拠して、人に害をなし、小頭と案山子の二人の友達はその魔法によって彼を征服する。“小頭”は岩窟の隙間から頭を入れてその動静を探り、案山子は彼が出てくるのを待って、肩で挟むと、鎖骨の凹みに入れて捉えてしまった。こうした考えは荒唐で、本人たちには随分失礼であったが、その時は非常に愉快で、今の言葉で言うと、この劇を演じている時は実に生活を充実させ得る数少ない瞬間の一つであった。われわれは喜劇も演じた。「賀家の武秀才を打ち負かす」の類だが、あまりに現実と近すぎ、十分な喜びを感じられなかったので、経験から言えば、このでっかち頭の劇が面白いの第一となるだろう。あとで北京で旧劇を見て、精神的に一種の打撃を受け、演劇についてはほとんどそれ以後絶縁し、過去を振り返っても全身全霊で演劇に生きた一時期があったということさえ、誠に自分でもいささか信じられないくらいである。

以上自分の経験によっても、児童劇の必要は十分に証明された。一方教育の専門家の方でも主張があって、更に有力な保証になる。近日アメリカのスキナー〔Skinner〕、シジウィック〔Sidgwick〕とノイエス〔Noyes〕諸氏の『児童劇』と日本の坪内逍遙『家庭用児童劇』一二集を読んで、非常に興味を覚え、中国にもこうした本が一二出て、家庭や学校の用に供せたらと思った。理想の児童劇はもちろん児童の自作自演であるが、一二参考指導する本も不可欠で、しかもそれによって大人たちに具体的な説明をしてやり、彼らに正当に理解させることが、最も重要である。児童劇は幼稚教育において当然とても有効であるが、これは広義のものであるべきで、決して道徳や教訓の意義に限ることはできない。これは消極的に斟酌すべきで、何も害がなければそれでよい、しかもこれだけでも利益があると言える。だから因襲的な常識の目には合わないと思われることがたくさんあるが、それは構わない。荒唐でも、怪異でも、幻虚でもなんでもよい。要するにここでの条件は、第一に肝要なのは童話の世界であること、現実の事物を素材とするけれども、全体の情調は非現実的であるべきで、霧の中に花を見るように、形も色も変化するところがあって、すべてが合作である。これはわたしが経験から抽出した理論である。作者はその童心を復活し、（難しい仕事だけれども）、心の奥底の鏡の影像にてらして、学芸の規律を参照して、描きさえすればよく、児童の必要とする脚本は成功する。たとい完璧だとは言えなくとも、十の六七は得られている。

われわれは社会心理に迎合して、群衆のために応制の詩文を作ってやる義務はない。しかし児童心理に迎合してかれらに文芸作品を供給する義務は、われわれにはあるのだ。ちょうどわれわれが老輩へのアヘンの供給を拒絶すべきだが子どもへのミルクを供給せざるを得ないように。わたしはわらべ歌や童話以外に、美しく健全な児童劇の脚本が中国に出て、彼らが中庭の木陰で歌ったり読み上げたり、あるいはロマンティックな物語を演じ、正当に得るべき喜びを享受することを希望する。

※初出：1923年3月8日『晨报副刊』